

松沢研究奨励賞受賞者 研究報告

授業づくりを通じた学級づくりと児童理解を目指して

第5学年「環境をともし守る～水俣病が語りかけるもの～」の実践を通して

教育人間科学部学校教育課程 H18年3月卒

横浜市立山元小学校 主幹教諭 小林 宏幸



1 はじめに

本研究の主題は「授業づくりを通じた学級づくりと児童理解を目指して」いくことである。これは、私が勤務する山元小学校の学校研究にもつながることであり、私自身もまさに目指していることである。さらには、学校教育において普遍的に大切なことだとも感じている。

そこで本研究では、「授業づくりを通じた学級づくりと児童理解を目指して」いくとはどのようなことなのかについて、実践における具体的な子どもの姿をもとに考えていきたい。

2 研究主題について

山元小学校の学校研究で大切にしていることと本研究主題とのつながりについて述べる。

山元小学校では、学校教育目標「自分を大切にできる子 共に生きる子 山元の子」の実現に向けて、生活科・社会科の学校研究を柱に教育活動を行っている。その根底にあるものは、研究理念である「生活科・社会科を窓口とした『学級経営』『児童理解』の研究」である。これはまさに、本研究主題の「授業づくりを通して学級づくりと児童理解を目指していくこと」と一致している。そのため、私は授業において「子どもの考えを生かすこと」を心構えとして、子どもの見とりを大切にした授業づくりに努めることを大切にして取り組んでいる。

また、山元小学校では単元を通して注目したい子どもを設定することや、社会科では「『その子なりの納得の姿』を大切にした授業づくり」を目指し、正解を求める学びではなく、子どもたち一人ひとりが対話を重ねながら納得解を求めて事象の本質に迫っていく学びを大切にしている。これらのことを踏まえ研究に取り組んだ。

3 研究主題に迫るために

本研究では、本時の授業分析を中心として、「本時の授業記録」を起こした。そして、具体的な子どもの姿や教師の指導性をもとに、研究主題に迫るための有効な手立てについて考察することにした。手間がかかり遠回りのようでも、授業記録を起こしその中に見られる子どもの姿に学んでいくことこそが、授業改善していく上で大切だと考えたからである。

4 実践と考察

ここからは実践をもとに考察を述べていく。

(1) 人の営みに焦点を当てた単元づくり

本実践では、公害の中でも熊本県の水俣市で起こった水俣病を取り上げ、水俣病の解決に生涯をかけて尽くしてきたSさんや取材に協力してくださったKさんに焦点を当てて学習を進めた。特にSさんは、自分や家族が水俣病になり、病気や差別と向き合いながら水俣のまちの人間関係や環境の修復を目指してきた方である。このSさんの営みや生き方に寄り添いながら進めることで、子どもたちが学んだことを自分の生き方に生かしていけるようにしたいと考えた。

(2) 見とりを生かした対話的な学びを通して、子どもから問題を生み出す

本時では、第一次訴訟での裁判の場面を取り上げ、多くの方が加害である工場の味方をすることやその状況下で本心を言えない住民もいたことを捉え、患者側の立場に立つことの難しさについて考えていくことを目標とした。

そこで、前時では、裁判当時の様子を子どもたちが具体的に捉えられるように、自作の紙芝居を資料として提示した。資料を通して子ども

たちは、国が水俣病の原因は工場の排水であると認定したにもかかわらず、多くの人たちが工場の味方をして未だに患者を差別していることについて問題意識をもった。この前時での子どもたちの考えを見とり、本時では子どもたちが対話的に学び合えるように、子どもの考えを生かしていくことに努めた。

本時の前半では、子どもたちが紙芝居をもとに感じた思いや考えを自分の言葉で語る姿や、自分の考えと友達の考えをつなぎながら学び合う姿が見られた。その学び合いの中で、「国が水俣病の原因は工場だと認めたのに、どうして住民や役所の人たちはSさんたちに差別を続けたのか」という問いに焦点化することによって、子ども同士の対話的な学びを通して、子どもから新たな問題を生み出すことにつながった。

(3) 本時の振り返りの見とりから次時の計画の修正へ

本時の後半では「どうして住民や役所の人たちはSさんたちに差別を続けたのか」という新たな問題に対して、次のような資料を提示した。

【資料：本当のことが言えない住民の話】

当時、水俣のまちに住むほとんどの人が「工場のおかげで水俣のまちは成り立っている」と考えていました。その中で、患者さんの味方になって助けたいと、心の中では思ってもできませんでした。助ければ、自分がいじめにあうからです。そして、時には自分も、本当はいけないと分かっているながら、周りに合わせて差別をしてしまうこともありました。

この資料から子どもたちは「差別はいけない」と言葉では簡単に言えるが、実際に患者の立場に立つことの難しさを考えていった。ある子どもは次のように本時の振り返りを書いた。

Sさんたちを助けたいという気持ちがあっても、いじめや差別を受けて自分が苦しくなってしまうという気持ちの方が大きく、自分もまわりの人に合わせてしまうかもしれない。

この姿は、Sさんや水俣のまちの状況を自分事に引き寄せ「いじめや差別を受けている人がいたとき、自分はどのように行動すべきなのか」を自問自答しているように感じた。

このような子どもの姿から、本来の次時の予定を修正し、取材で出会ったKさんの言葉を伝えることにした。その結果、子どもたちは「このような状況に出合ったとき、自分はどうすべきなのか」について、Kさんの言葉をもとに自分自身を見つめながら考えていった。

5 おわりに

これはある子どもの単元の振り返りである。

ぼくはこの水俣病という単元がすごく深いものだと思います。なぜなら、意見がすごく変わるからです。最初は「工場が悪い」「何で毒を海に入れたんだ」と思っていました。けれど、Sさんたちが裁判で勝ったら工場で働いている人は生活が苦しくなってしまう。だから、どちらを優先した方がいいか分からなくなりました。でも最後にはやっぱりSさんたちを優先して考えた方がいいと考えました。このように意見がすごく変わることから水俣病はとても深いものだと思います。(略)このように水俣病は、自分にとってすごく役立つ学習になりました。もしぼくも住民たちと同じ状況になったら、勇気ある発言者になれなくても勇気ある発言者を支えられるようにしたいです。

この振り返りからは、学級の仲間と学び合う中で自分の考えが揺れ動き変容してきたことや、SさんやKさんの生き方に触れることで自分の考え方や生き方の成長につながったことが伺える。また、本研究を通して研究主題を実現するためには、子どもの考えを見とり、授業の中で生かしていくことや、授業の中で見えてきた子どもの姿や振り返りから今後の学習計画を修正していくといった「子ども・教材・授業をつなぐ教師の指導性」が大切であることが見えてきた。

最後に、研究主題である「授業づくりを通して学級づくりと児童理解を目指していくこと」には、「こうすればうまくいく」というマニュアルはない。だからこそ、本研究のように子どもの具体的な姿をもとに自分の実践を振り返り省察していくことが大切であると考えられる。これからも子どもの考えを生かし寄り添っていける教師を目指して学び続けていきたい。